

市政ニュース

仲間と一緒に市長を囲んで

中貝市長とふれあいトーク



▲夢と希望にあふれた高校生たち

「中貝市長とふれあいトーク」は、平成21年度から毎年開催しています。実施してきた5年の間、多くのグループが市長と楽しく語りました。今年も、7月22日から8月6日までの間に6会場で開催し、17グループが参加しました。

このように仲間が集まり気軽に話せる場では、さまざまなアイデア・提言も出てきます。市では、今後も、地域単位の懇談会などで多くの市民の皆さんの意見を聴くとともに、少人数の気軽な話し合いの場を作り、「対話と共感」の市政を推進します。

看護師としての将来の夢を熱く語る高校生。子育てで支援のお手伝いをするお母さん。少子高齢化が進む中、地域の活性化に取り組むグループ。後継者の育つ安定した農業経



▲地域を支える女性グループはとても元気

市民交流センター「豊岡稽古堂」完成を祝して

扁額「稽古堂」などの寄付を受けました

市は、北但大震災復興建築物である旧本庁舎の1・3階を市民交流の場とすることとし、その名称を「豊岡稽古堂」としました。「稽古」には、いにしえに学ぶという意があり、歴史を引き継ぐ建物にふさわしい名です。7月26日、豊岡藩藩主家の現当主京極高晴さんから、豊岡藩藩校「稽古堂」に由来する二つの扁額「稽古堂」と「稽古堂記」の寄付を受けました。

京極さんは、「市長は、教育以外でもスケールの大きな考えをお持ちであり、寄付しよ



▲中貝市長(右)に扁額「稽古堂」を手渡す京極高晴さん(左)

川崎尚之助がつなぐ交流

会津若松市長が豊岡・出石に来訪

市は、NHK大河ドラマ「八重の桜」が縁で、会津若松市と交流しています。これまで、中貝市長や但馬國出石観光協会などが同市を訪問したり、會津藩校「日新館」館長が本市で講演するなどしてきました。

7月19日、同市の室井照平市長が来訪し、川崎尚之助生誕の地「出石」の願成寺や出石



▲室井会津若松市長(右から2人目)を囲んで

永楽館を視察しました。

主な市政の動き

7月

- 16日・港認定こども園新園舎完成
- 17日・豊岡高等学校企業見学会(25日・豊岡総合高等学校)
- 19日・会津若松市長来訪
- ・ミュージアムスタンプラリー(12月26日)

8月

- 20日・三江小学校人工巣塔でコウノトリのひな巣立ち(野外での今季最後の巣立ち)
- 22日・中貝市長とふれあいトーク(23・26日、8月5・6日)
- 27日・コウノトリ但馬空港フェスティバル13(28日)
- 1日・「永楽館歌舞伎」発行
- 2日・豊岡エキシビジョン2013(9月5日)
- 5日・世界一田めになる学校in 東京大学2013
- 8日・新庁舎防災訓練
- 10日・このとり子育て・育脳講演会
- 13日・新庁舎開庁式・記念イベント
- ・豊岡復興建築群見学ツアー

44年ぶりの復原、その後の歌舞伎ものがたり

冊子「永楽館歌舞伎」発行

出石永楽館は、平成20年7月に近畿最古の芝居小屋としてよみがえりました。

同年8月に復原を祝う永楽館柿落大歌舞伎を上演。以来毎年、歌舞伎公演を開催してきました。

8月1日、第5回公演を記念した冊子「永楽館歌舞伎」を発行しました。

冊子には、出石永楽館復原経緯や初回から連続で座頭を務める片岡愛之助さんのインタビュー、過去5回の歌舞伎公演、出石永楽館の施設案内のほか、豊岡市の主な観光情報も掲載しています。

これにより、出石永楽館での歌舞伎上演を全国にアピールするとともに本市の魅力を

伝え、観劇者や観光客の増加を図ります。



▲冊子「永楽館歌舞伎」。熱い思いと魅力が満載

テーマは、作るゾー「Tamboman」 「世界一田めになる学校」に東京大学2013を開催

8月5日、毎年、夏休みに1日だけ開校する「世界一田めになる学校」を東京大学で開催しました。

この学校はコウノトリの郷・豊岡とマガンの里・大崎トキの里・佐渡の三つの地域が田んぼとそこで生まれる小さな命の大切さを全国に訴えるため、平成22年から開催してきました。今年から、栃木県小山市も参加し、その輪は広がりを見せています。

授業は、東京大学大学院教授の鷲谷いづみさんを校長に

ゲストの先生を招いて行いました。「図画・工作」の時間は、田んぼの大切さを伝えるキャラクター「Tamboman」を作る過程で、田んぼの持つ多様な意味を考えたり、それを守るにはどんな行動をすれば良いのかを会場全体で話し合いました。

豊岡から参加した子どもは、『私が考えるタンボマンは、お米を食べる全ての人。もったなくさんの人にお米を食べてもらい、田んぼや生きものを守ってほしい』と訴えていました。



▲みんなで「Tamboman」を作った

今後、数回の授業や会議を開催し、来年開催のESDUネスコ世界会議や韓国での生物多様性条約第12回締約国会議などでの発信を目指します。

中貝市長の徒然日記 ⑦

詩人の国

私たちの日々の暮らしは、平凡に流れていく時間の中にあります。家族とのささやかな団らんがあり、友人とのたわいもないおしゃべりがあり、仕事は昨日も今日もあつて、明日も続いていきます。その流れていく時間が、もし豊かでないとすると、人生は、結局は貧しいものになってしまう。

そこで人類は、さまざまな工夫をしてきました。音楽、踊り、絵画、書、スポーツ等々。お茶会などは、緑色の粉末を湯に入れ、攪拌してさつさと飲めば済むものを、軸を掛け、花を生け、茶碗を選び、頭を下げたり上げたりあいさつを交わしたりして、やっといただきます(正座が苦手な方には、飲むための作法というより、飲ませていただくための「儀式」のように思えるかもしれません)。二度と帰らない時間を惜しむかのように万事が進んでいきます。1951年に豊岡カトリック

ク教会に赴任してきたベルギー人のグロータース神父が、著書の中でこんなことを書いています。

日本の新聞には、世界中のどんな新聞にも出ていないことが載っている。それは読者から送られてくる俳句と短歌のコーナーである。A社の場合、毎週40、1年で2千、20年以上続いているから、採用されたものだけでも4万篇の詩が送られてきたことになる。他の新聞社も同様である。その詩人たちは、しばしば朝の通勤電車に乗っているごく普通の人である。こんなに大勢の詩人がいる国は、日本以外どこにもない、と。

かつて政策を訴えて豊岡で1軒1軒回ったとき、入る玄関、入る玄関、立派かささやかにかかわらず、絵や書が掛けられ、お花が生けられています。下駄箱の上の牛乳瓶に1輪、という家もありました。

その人々の思いに、いともしさすら感じたほどでした。なるほど。確かに日本は、「詩人」の国です。